

〔絵画名品展によせて〕

婦女遊楽図屏風(松浦屏風)と初期洋風画

「婦女遊楽図屏風」には、十八人の婦人と童女をほぼ等身大に近い大きさに描いています。おそらく、婦人は遊女、童女は遊郭で養われた禿と思われる。遊女たちは豪華な衣装をまとい、三味線、カルタに興じ、髪を結び、化粧をし、手紙を認めながら、思い思いに時を過ごしています。日常の姿ですが、少しも気の緩んだ様子は見せません。豊かな黒髪と恵まれた体躯、落ち着いた自然な仕草は、贅沢な気分を漂わせています。背景には右隻の双六と着物、左隻の硯箱、煙草と火入の他には何も描かれていません。金箔の光はただ遊女たちと豪華な調度品のために輝いています。この作品は風俗画としては特異です。遊郭の情景を伝えるでもなく、室内の様子さえ説明していません。遊女たちがこれほど多様な姿で会することも実際にはないでしょう。一人で独立し、あるいは二三人で一組となる遊女たちは、別々の背景から抜き出され、集められたようです。遊女たちは画面の右から斜めに列をなして奥へ連なり、六曲一双の屏風を通して、左右がほぼ対称の関係になる群像にまとめられています。この作品には贅を極めた遊女たちの世界が凝縮されています。

「婦女遊楽図屏風」を収める箱の外側には、二枚の札が貼られています。その一枚には「又兵衛筆浮世絵」と記され、「松浦家」の朱文の長方印を押しています。この作品が「松浦屏風」と呼ばれるのは、平戸藩松浦家の所蔵品であったという伝来によります。京都大学付属図書館に『平戸藩楽蔵蔵書目録』という冊子が所蔵され、その中に「婦女遊楽図屏風」と思われる記載があることが、京都大学教授、松田清氏によって明らかにされました。この冊子は静山の号で知られる平戸藩第九代藩主、松浦清(1760～1841)自身による蔵書目録の写本です。その巻十五別録に「遊女之図屏風 又兵衛金玉画府 五卷六卷二見ユ 一 双」、「浮世又兵衛画 又兵衛未詳之元ハ京ノ猪飼太右衛門蔵 天明七年丁未贈予」と記され、天明七年(1787)に静山に贈られたことがわかります。有職故実や時代風俗に高い関心を持っていた静山にとって、南蛮趣味溢横する「婦女遊楽図屏風」は、南蛮貿易の地であった平戸と関係の深い作品に思われたのでしょう。作者とされる又兵衛は浮世絵の祖と伝えられ、慶安三年(1650)に73歳で没しています。又兵衛に関しては「未詳之」と記してい

婦女遊楽図屏風 江戸時代前期



婦女遊楽図屏風(部分)

ますので、松浦家に所蔵される以前の伝承と思われる。描かれた風俗から、江戸時代前期に活躍した又兵衛を作者と考えたのでしょうか、又兵衛作品と「婦女遊楽図屏風」には、あまり共通点がありません。むしろ、又兵衛作品以上に「婦女遊楽図屏風」に近い表現が見られるのは、キリスト教ともにもたらされた西洋画法に基づく初期洋風画です。初期洋風画では、当初は専ら聖画を制作し、やがて南蛮趣味の流行に応え、西洋風俗画を描くようになりました。大和文華館の所蔵する「婦女弾琴図」もその一つです。この作品では西洋婦人が楽器の音色にうっとりとして聞き入っています。首を傾げる耽美的な姿勢は初期洋風画の特色ですが、この姿勢は「婦女遊楽図屏風」の手紙を認める遊女にも採用されています。この他にも「婦女遊楽図屏風」の多くの遊女たちの輪郭は、初期洋風画の人物と共通しており、群像表現におい



婦女弾琴図(部分) 信口筆

ても同様のことが指摘できます。「婦女遊楽図屏風」は昭和二十七年に大和文華館の所蔵となり、昭和二十九年に国宝に指定されました。購入に当たったのは初代館長であった矢代幸雄です。矢代幸雄は元来、西洋美術を研究し、後に東洋美術に転じた美術史研究者でした。矢代幸雄はこの作品について、「私はこれを桃山時代輸入の西洋画構図やその風俗描写の影響を受けてつくられた珍しい製作と見る」(『私の美術遍歴』岩波書店昭和四十七年刊)と述べています。よく美術作品は所蔵者を選ぶと言われます。「婦女遊楽図屏風」が初期洋風画から影響を受けたとすれば、「婦女遊楽図屏風」の造形表現に込められた、遠く西洋のキリスト教絵画につながる美意識が、時代を越えて、松浦静山、矢代幸雄という二人の国際的な視野を持つ文化人の琴線に触れたと言えるでしょう。

(中部義隆)



季刊 美のたより No.134

平成13年4月5日

発行 大和文華館